

楽園 第3話

takamiism

『穴の前で』

「ここしばらく、『現に』の話をしているけれど」

「そうだったね」

「その『現に』というのは、何の説明にもなっていないような」

「何かを証明したいわけではないからね」

「何も解明しないの？」

「論証したいわけでもない」

「相手を説得できないんじゃない？」

「説得しようと思っていないよ」

「では、どうしたいの？」

「すべてを、そのままにしておきたい」

「それなら、長々と言わなければいいんじゃない？」

「ごもつとも」

「認めちゃったよ」

「ついつい、言いたくなって、考えたくなるもので」

「どうして？」

「きっと、目の前にあるものを受け入れるための儀式なんだね」

「儀式が必要なものなの？」

「普段は、気がつかないからね」

「気づいたとして、どうにかなるもの？」

「どうなるわけでもない」

「儀式までしたのに？」

「そのままにしておくわけだから」

「何もしないんだ」

「ただ、それをそれとして、認めるだけ」

「それに、意味、ある？」

「ないといえば、ない」

「あるといえば、ある？」

「あえて言うなら、認識こそ力なり、ということかな」

「何だか、難しい言い方だね」

「そういう言い方もできる、ということで」

「でも、認識しても、どうにもならないんだよね？」

「どうにもならない、ということが、わかるわけだ」

「だから、それが何になるわけ？」

「運命論という考え方が、あってね」

「あれ、話、変わった？」

「聞いたこと、ある？」

「『起こることは、すべて、あらかじめ決まっている』という考え方のこと？」

「普通の運命論では、そうだね」

「普通の？」

「いわゆる運命論、弱い運命論、と言ってもいい」

「ということは、強い運命論も、あるの？」

「起こることは、すべて、現に起こる」
「お、きたね」
「慣れてきた？」
「そろそろね」
「あらかじめ、決まっているわけではない」
「え、どういうこと？」
「たとえば」と
「たとえなくても、いいけど」
「何か、神さまのようなものが、世界の背後にいて」
「超越的な神さま、だったよね」
「すべてを見通したり」
「監督したり、裁いたり」
「などということは、ない」
「また、『現に』の話だね」
「その神さますら現れさせるような、力のようなもの」
「ようなもの？」
「力というか、動きというか」
「ぼんやりしてきたね」
「はっきりとは、わからないもので」
「一言でいうと？」
「あるようにある」
「本当に、そうなのかな？」
「さあ」
「また、そんな」
「あくまで、仮説です」
「説明は、しないんじゃないかった？」
「とりあえず、こうかな、というところで」
「あとで、その仮説を変えることもあるの？」
「もちろん」
「どういう基準で？」
「サイズの合っていない服を着ている時のような、息苦しさを感じた時かな」
「また、たとえが出てきたね」
「潔く」
「変える？」
「捨て去る」
「そうやって、進んでいくんだ」
「じっくり、ゆっくり」
「最終的に、どうなるの？」
「今、ここにいることを確認する」
「やっぱり、それだけ？」
「たった、それだけ」
「それだけのために、今、こうして対話をしているの？」
「それが、哲学というものだよ」
「そうなんだ」
「すばらしいでしょ？」
「えっと、どこが？」